当事者による熱帯林のガバナンス
大型類人猿研究者による自己正当化として

竹ノ下 祐二
中部学院大学教育学部准教授

1. はじめに

本稿では，私が現在とりくんでいる，ガボン，ムカラバ国立公園北部における地域住民との協同によるゴリラ研究・保全プロジェクトを題材に，大型類人猿の野外研究にたずさわる霊長類学者という立場から，熱帯森林のローカル・ガバナンスについて考察する。

2. 大型類人猿の野外調査

2-1　野外研究への厳しい視線

近年，野生大型類人猿の野外研究は多方面から厳しい目をむけられ，多くのエクスキューズを求められるようになってきた。それは，大型類人猿の野外調査が生息地の自然環境や地域社会に多大なインパクトを与えるためである。ただし，大型類人猿の野外調査といってもその目的や内容は千差万別であるので，主として(1)特定の集団を対象に，(2)社会や生態を解明する目的で行なわれる調査，を念頭に，そのインパクトを説明しよう。

大型類人猿の寿命は長い。また，群れの遊動域は数十平方キロメートルから，時には数百キロメートルにも及ぶ。必然的に，調査地は広域になり，調査期間は長大になる。

調査のためには，調査地の自然環境をかなり攪乱してしまう。調査路を開いたり，測定器具を設置したり，キャンプを開く。広域を移動するため，森林内にバギーやバイク，四輪駆動車などを持ち込む。

調査の地域社会へのインパクトも大きい。大型類人猿の調査では多くの人々を“トラッカー”などとして雇用する(竹ノ下 2014)。こうした現地雇用によって地域に多額の現金が落ちる。また仕事を求めて近隣地域から人が集まってくる。さらに，研究者らが滞在するうえで多くの消費行動が行われる。こうした社会経済の変化は地域の人々の人間関係や文化にも影響する。

2-1　多方面からの批判

こうした地域の自然・社会へのインパクトの強い営みに対して，2000年代以降，自然の側に立つ保全家と，地域住民の側に立つ人類・社会学者の双方からの視線が厳しくなってきている。

野生生物保全に携る人々(以下，保全家)は，研究活動そのものが生物多様性に与える負のインパクトに対して以前よりも厳しい態度を取るようになってきた。研究から得られる情報は保全活動に役立てることができる，研究者の存在が潜在的に密猟などの違法活動の抑止力となる，研究活動にともなう雇用が地域住民に対して森林の収奪的利用にかわる代替生計手段を提供するなど，研究活動には保全にプラスの面も多い。しかし，そうしたプラス面は研究以外の保全活動による利益と常に比較される。たとえば，研究よりも，国立公園のパトロールやエコツーリズムのほうが保全効果も雇用効果も高いと言われる。一方で，人類・社会学者は，霊長類研究プロジェクトがもたらす社会的インパクトを，地域住民の社会や文化の無遠慮な改変だとして批判する。

2-3　当事者として

私は，保全家や社会・人類学者による批判の内容自体は正当なものであることを認める。野生霊長類の野外調査が地域の自然と文化・社会に影響するのは避けられない。そして，住民にとっても，野生生物にとっても，霊長類学者は本来いなくてもかまわない存在である。だから，少くとも私は外部の者としてそこに「いさせていただく」ことに対して感謝し，批判には真摯に耳をかたむけ，熱帯林に関わる当事者として現場のさまざまな課題に対処してゆこうとしている。

ところが，批判者たちはそういう気持ちには無頓着である。かれらはかたや自然の，かたや人間の「代弁者」として，あくまで傍観的な立場に留まり，自分自身の責任を回避したままで当事者たる霊長類学者を批判する。そのじつ，かれらは自分自身の存在や活動が

地域の生態系や社会に与えるインパクトには決して触れない。

だから私は批判の内容自体は受けとめつつも，批判されることに対しては自己の正当性を主張したいと考える。本稿では，私が実際に当事者として行なってきたガボンにおける大型類人猿研究プロジェクトのあゆみを振り返りつつ，「霊長類学者の自己正当化」を通じて，本研究会のテーマである「熱帯林のローカルガバナンス」に関して若干の考察を行ないたい。

3. ムカラバ・ドゥドゥ国立公園における，日本人グループによる大型類人猿研究

3-1　概要

本稿の舞台はガボン共和国南西部にあるムカラバ・ドゥドゥ（Moukalaba-Doudou）国立公園である（図1）。著者を含む研究グループはムカラバの北部で1999年から大型類人猿の野外調査を実施してきた（竹ノ下 2004）。2000年には京都大学動物学教室とガボン熱帯生態学研究センターとのあいだでムカラバでの類人猿調査のための研究協力協定を締結した。2003年には国立公園の中に長期滞在を前提としたキャンプサイトを設置し，同時に国立公園に隣接するドゥサラ村に調査拠点として家を建てた。そして研究者を長期派遣してゴリラの「ヒトづけ」に着手した。

ヒトづけは2008年までにおおむね達成された（Ando et al. 2008）。ヒトづけの進行とともに調査に来る研究者の数は増え，2007年にはガボン人の若手研究者も調査隊に加わった。そうした実績のもと，2009年には国際協力機構（JICA）と科学技術振興機構（JST）の合同事業である「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム」（略称SATREPS）の第一期採択事業として，「野生生物と人間の共生を通じた熱帯林の生物多様性保全プロジェクト」（略称PROCOBHA）が始まった。これは，大型類人猿だけでなく，かれらを含むムカラバの熱帯林の生物多様性を包括的に保全するための基礎研究と応用研究を行なう，大きなプロジェクトであった（竹ノ下・山極 2010）。日本とガボンの双方から多数の学生，研究者が参加し，2014年9月，5年間のプロジェクト期間が終了した。

3-2　ドゥサラ村

ムカラバでの調査活動と切っても切れない関係にあるのが調査地と隣接するドゥサラ村（Doussala）である。1962年に現在のドゥサラ村のある場所で伐採会社が操業を始め，それまで周辺に点在していた集落の人々やさらにその外部から人々を呼び寄せ吸収する形で現在の村が形成された。一時は人口1,000人を超えたというが，1989年に伐採会社が撤退すると，それにともなって村も衰退し，基地と都市をむすぶ道路もすっかり劣化し，ガボン有数の伐採拠点はあっという間に廃墟の村と化してしまった（松浦 2014）。

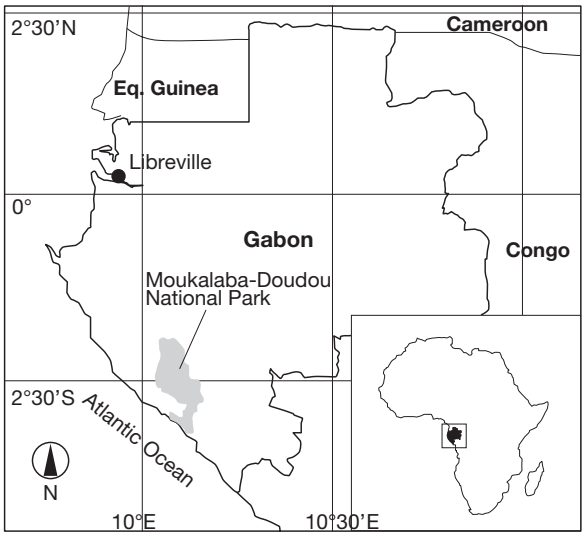

図1　ムカラバ・ドゥドゥ国立公園

3-3　調査チームとドゥサラ村の関係

ガボンでは，行政組織や地域コミュニティ以外の社会組織は「ソシエテ」もしくは「プロジェ」に大別される。「ソシエテ」は企業やNGO，公社など，行政機関を除く大きな法人を指す。「プロジェ」は「ソシエテ」のように法人格はもたないが，国に認められて何らかの活動をするために訪れる人々の集りを指す。

ドゥサラの人々――というより，より一般的にガボンの地域住民――とソシエテ・プロジェの関係は，国家のなかだちのもとで形成される。地域住民は原則として「ソシエテ」や「プロジェ」を受け入れに条件をつけたり拒否したりはできない。なぜなら，ソシエテ・プロジェの活動はガボンという国家との契約や許可のもとで行なわれるからである。その一方で，ソシエテ・プロジェから地域住民をまもり，彼らの権利を保障するのも国家権力である。ソシエテ・プロジェが住民の意向を斟酌しないかわりに，住民もまたソシエテ・プロジェを尊重しない。不満があればすぐさま地方行政官や駐在憲兵，地元選出の議員等に告発する。そして，統治機構がソシエテ・プロジェを指導し，地域住民の利益が保全される。地域住民にとってソシエテ・プロジェは，いわば国家がかれらにあてがった「パトロン」

である。

われわれ大型類人猿の調査を行なう日本人グループも，はじめはそのような「パトロン」として村に迎え入れられた。村人は，われわれを伐採会社にかわって国があてがった「パトロン」とみなし，学校や病院の建設，橋や道路の整備，村人の雇用など，とても対応しきれないような法外な要求をつきつけてきた。そこで，われわれは，研究グループはソシエテでもプロジェでもなく政府による後ろ盾はないこと，村に来た理由は開発のような利益を生むものではなく，研究目的であることを直接村人に説明すると同時に，調査は村の人々と一緒に行ないたい，村人の協力なしには調査が成立しない，したがって，村がわれわれを受け入れてくれなければ立ち去るしかないと述べ，彼らに直接，協力を依頼した。その結果，村における数度の会議を経て，「調査に関わる人足は，ドゥサラ村を含む近隣3村の人間を雇用すること」という条件で合意にいたった。われわれは住民の懐に飛び込んで，制度や国家権力のなかだちによらずに調査地を開くことができたのである。

3-4　村人との協働によるゴリラのヒトづけ

研究用のゴリラのヒトづけは2002年に開始されたが，ヒトづけは名目的にも実質的にも住民と研究者の協働によってなしとげられた。ヒトづけを担当した安藤智恵子さんはそれまでゴリラの調査はおろか中部アフリカに滞在した経験すら皆無であった。村で雇用したトラッカーたちもゴリラの追跡など初体験であった。安藤さんとトラッカーたちはキャンプで協同生活をし，毎晩夕食にその日の森の踏査をふりかえり，ゴリラと遭遇したり痕跡を発見した場所を地図に記入し，それを見ながら翌日の踏査計画をたて，どうすればゴリラとの遭遇頻度を向上させられるか，ゴリラの遊動パターンはどういうものかを話しあった。

トラッカーとして働かない人にもさまざまな形で調査にかかわってもらった。トラッカー以外の男たちには，調査路の手入れなど，ゴリラの追跡以外のさまざまな仕事を手伝ってもらった。女性たちはキャンプキーパーとして雇用したが，バカンスの期間は町の学校に通っている少女たちが夏休みのアルバイトとしてそれを行なった。子どもたちはポーターとして村とキャンプのあいだで物資を一輪車で運んでもらった。年配の人は，豊富な森林知識を活かして，植生調査や森林内の果実の結実状況調査に従事してもらった。キャンプ地の炊事場やテント場には椰子の葉で屋根を葺いたが，これは年寄りの独壇場であった。まさに村ぐるみの協力であった。

4. 大型類人猿調査が村にもたらしたもの，もたらさなかったもの

このように村ぐるみで行なったゴリラのヒトづけは，村に「成功体験」をもたらした。実際にヒトづけに関わったトラッカーたちはもちろん，多くの村人がヒトづけの成功を「わがこと」として捉えていた（Takenoshita 2015）。これは，調査隊と村人の関係が，従来の，国家になかだちされた「プロジェ」と「地域住民」の関係ではなく，村がそのコミュニティの自由意志として調査隊を受けいれていたことが大きい。

調査による村へのプラスの効果として，森林に関する在来知の復元や更新が進んだことも述べておきたい。われわれ調査隊が重宝したのは，従順な労働者ではなく，森仕事やキャンプ生活を送るのに役立つ知識や技術を持っている人だった。比較的そうした知識・技能に長けている者とそうでない者を組み合わせて働いてもらううち，知識や技術の伝達が生じた。また，ゴリラのヒトづけを通じてあらたに森林知識が得られ，共有されていった（Takenoshita 2015）。

その一方で，調査隊が地元に落とす賃金は村に多くをもたらさなかった。現金収入の多くは酒や消費財に消えるか，子どもを首都の学校に通わせる学費などとして村外に流出した。最初の調査から10年が経過した2009年の村の外観は，1999年と変わりないどころか，より廃墟化が進んだかのようであった。

5. PROCOBHA――失なわれた5年

5-1　住民との関係の悪化

2009年から2014年までに実施されたSATREPS事業によるPROCOBHAは，そうした状況に対する対応であった。PROCOBHAは，「科学的データに基づく，地域住民主体の国立公園の管理手法の提案」を目標とし，基礎研究としての大型類人猿調査だけではなく，ムカラバの生物多様性保全のための具体的な手段を提供することと，地域住民が保全と両立する形で持続的発展をとげるような仕組みづくりを目的としていた。そのために，我々はガボン人研究者との協働をすすめることにした。日本人研究者が村を丸抱えするような体制から，プロジェクトの運営を当地国の人であ

るガボン人研究者主導に切り替えるとともに，地域住民がもっと主体的に調査や保全活動に関わりながら，自分たちの生活を豊かにしてゆくことを目指した。

PROCOBHAは，SATREPS事業としては当初目的を達成し，成功裏に終了した。しかし，それは“本当に”成功だったのだろうか。たしかに，実施期間中，ゴリラのヒトづけはさらに進み，生物多様性保全に貢献できる多くの研究成果があげられた。また，霊長類学や生物多様性保全を専門とするガボン人研究者の育成では大きな成果があがった。しかし，PROCOBHAの期間，調査隊と村人との関係は，これ以上ないほどに悪化してしまったのである。

関係の悪化は，PROCOBHAがはじまるや否や，協同研究者として調査隊に加入したガボン人研究者と調査助手との対立という形ではじまった。日本人研究者に対して調査助手全員の連名による「ガボン人研究者排除要求」がなされ，その解決のためには多大な時間を要した。

しかし，その後も，調査助手やそのほかの村人は調査隊に対して非協力的になっていった。調査助手たちは何かにつけ雇用条件の改善を訴えるようになり，そのネゴシエーションのために調査はしばしば中断を余儀なくされ，最終的にはストライキにまで発展した。

調査に関わらない村人による調査妨害も増えた。調査助手は何かにつけ村でのもめごとに巻きこまれ，仕事に支障をきたした。キャンプに幽霊があらわれ調査が2回中断させられた。2回とも，大掛かりな「お祓い」をせねばならなかった。最終的には，キャンプで何者かの放火と思われる不審火が発生する状況に至った。

大型プロジェクトであったPROCOBHAは，村に多くの雇用をもたらし，それまでとは比べものにならないほどの現金を村に落とした。しかし，それらの現金は結局それまで同様，酒や消費財に消えるか，村外に流出してしまった。そして，PROCOBHAの終了とともに，村人の多くは得た賃金を元手に村を離れてしまい，村はいっそう廃墟化した。

5-2　何がいけなかったのか

PROCOBHA終了から2年が経過しようとしているが，正直なところ，私は未だに当時を思い出すのが苦痛である。だが，（公式には成功事例として語られる）PROCOBHAの失敗に目を向け，その原因をつまびらかにすることは，今後の調査隊の運営を考えるうえで不可欠であるとともに，「熱帯林のローカルガバナンス」を考えるうえでも，いくつかの示唆を与えてくれるに違いない。

PROCOBHAを通じて私がやりたかったことは，第一に住民の自己組織化である。その一方で，ガボン人研究者の主導による調査体制の構築を目指した。そして，ガボン人エリート（すなわちガボンの国家）と地域住民を結びつけ，従来の，「国が地域住民の主体性を尊重しないかわりに，パトロンとして外部者であるソシエテやプロジェをあてがう」形式から脱することを目論んでいた。

しかし，そうした意図は村の人々には伝わらなかった。それどころか，われわれがガボン人研究者との協働をはじめたことは，村の人々にとっては，日本人研究者が自分たち地域住民を捨て，国家機関に属するガボン人研究者をあらたなパートナーに選んだように映ったのだと私は考えている。上述のように，調査の初期われわれが構築した日本隊と村との関係は，国家をなかだちとしない直接の関係であった。われわれは，はからずも，その直接の関係を一方的に破棄し，自らを「国があてがうパトロン」の位置へと後退させてしまったのだ。そう考えると調査助手や村人の態度の急変をよく理解できる。PROCOBHA期間中の彼らのふるまいは，まさに従来の「パトロン」に対するふるまいであった。これは，ガボン人研究者の導入そのものが悪かったのではなく，そのやりかたに問題があった。ガボン人主導を急ぐあまり，現場で発生する諸問題をそれまでのように直接対話によって解決することを避け，それらをガボンの研究機関による決裁にゆだねてしまった。

調査隊がパトロンと化してしまっては，私が目指した住民の自己組織化の試みもその意味が変容してしまう。私自身は自分が村人の直接のパートナーだと信じて疑わず，かれらに寄り沿い，側面から住民の自己組織化を助けているつもりであった。しかし，実際の私は，パートナーからパトロンに成り下がっていたので，私のなすことのすべては村人にとっては「上から」のものになった。「対話」は「指導」に，「助言」は「指示」になっていたのである。住民主体の国立公園管理を謳いながら，実態は「トップダウン式のボトムアップ」であった。私自身の当時の気持ちを振り返ってみても，村人にこうあってほしい，という思いは強くあったが，実際に住民がどうしたいのか，ということへの関心は薄かった。むしろ，目先の現金収入ばかりに拘泥し収入をすぐに消費してしまう彼らを「なんとか導きた

い」という，きわめて上から目線であった。私が「村のため」と考えて実施した活動の多くはろくな結果をもたらさなかった。

5-3　村人の求めていたものとは？

では，ドゥサラ村の人々が望んでいたことは何だったのだろうか。かれらが求めていたのは，住民の自己組織化でも，国立公園管理への主体的管理でもないことは明白である。現在私は，これまでを振り返り，かれらが望んでいた（そして，今も望んでいる）のは，次のふたつだと考えている。

第一に，「普通の暮らし」を持続できるような社会基盤と自然資源が存続することである。すなわち，教師や教材も含めた学校，医薬品と保健師も含めた診療所，都市への交通手段，獣害の少ない農地，そして，日常生活に必要な現金収入源としての雇用と，狩猟や採集の場として利用できる森林や河川である。そしてそれらは，自分たちで管理しようと，別の誰かが管理しようと，村人にとっては大した問題ではない。

第二に，外部から見捨てられないこと，忘れられないことである。そのために必要なのは，人の往来である。すなわち，「自分たちを必要とするよそ者」の存在である。

保全家は，生物多様性保全には地域住民の参加が不可欠だという。しかし，それは，保全に地域住民が必要だという意味ではない。地域住民が反対すると物事が進まないからそう言っているのであって，本音は「人間はいないほうがいい」のである。一方で，人類・社会学者は，自分たちが地域住民に貢献すると考えこそすれ，地域住民を必要としているわけではない。かれらは，住民が特に問題もなく，「普通の暮らし」を送っているような地域には来ない。

それに対して，霊長類学者である私は，生物多様性保全というグローバルな価値観に従って動いているのではない。逆に，そうしたグローバルな価値観に反発し，地域のローカルな価値観をエンパワーするために来ているのでもない。あくまで，大型類人猿の生態や社会を知りたいという，「パーソナル」な動機でムカラバに来ている。そして，私が自身のパーソナルな動機を満たすには，ドゥサラ村がありつづけてくれなくては困る。私には村と村人の存在が必要なのだ。私はここに，大型類人猿研究プロジェクト（に属する私）の存在の正当性を見出すと同時に，PROCOBHAの「失敗」の原因が，私自身のパーソナルな動機を隠してしまっていたことにあったのだと考える。今思えば，村がわれわれ調査隊を受け入れたことこそが，「地域住民による主体的な国立公園管理への参加」であった。PROCOBHAは，それを否定してしまっていたのだ。

6. 結び

最後に，私自身がこうした「パーソナル」な体験を通して考える，「熱帯林のローカルガバナンス」について記して，結びとしたい。それは，ひとことでいえば，「ローカル」を「グローバル」の対義語として捉えてはならない，ということだ。

熱帯林のローカルガバナンスという概念を，グローバルな価値観に立脚した“外部”による熱帯森林の開発や保全への対抗概念として位置付け，“地域住民”による主体的な森林管理というように考えてしまうこと，それ自体がグローバルな価値観の肯定になる。言いかえると，グローバルな価値観の具現化としての保全思想や経済原理を受け入れ，“地域住民”の一人として“主体的に”コミットすることでしか，居場所を得られなくなってしまうのだ。そして，その図式のもとでは熱帯森林に暮らす人々の「パーソナル」な性質は排除されてしまう。ちょうど，霊長類学者である私の「パーソナル」な動機が，ムカラバで居場所を失なってしまったように。

「ローカル」が指し示すものは，概念としてではなく，地理的実体としての「地域」であるべきである。そして，「ローカルガバナンス」とは，住民であるか否かを問わず，その地域に当事者として足を踏み入れる者が，その場で，互いの「パーソナル」な存在理由を主張しあって妥協点を見い出すことである。開発業者や保全家が批判されるべきなのは，かれらがグローバルな価値観の下で動いていることでも，住民の当事者性をないがしろにすることでもない。むしろ，かれらがないがしろにしているのはかれら自身の当事者性である。かれらを排斥するのではなく，逆にかれらを当事者の立場にひきずりこむことこそが重要である。

謝　辞

本稿のもとになった調査活動は，京都大学の山極寿一氏をはじめ，ムカラバの調査グループのメンバーの多大な協力のもとで行なわれた。ガボン科学技術研究センター，国立公園庁には，調査活動に便宜を図って

いただいた。謹んでお礼申しあげる。また，ドゥサラ村の人々に対する，一言の謝辞では言いあらわせない思いを表明しておく。

引用文献

竹ノ下祐二（2004）「ガボン，ムカラバ＝ドゥドゥ国立公園の類人猿の調査と保護の現状」『霊長類研究』20, pp.71–72.

竹ノ下祐二（2014）「森の水先案内人――大型類人猿調査と「トラッカー」」椎野若菜・白石壮一郎編『フィールドに入る』古今書院, pp.52–67.

竹ノ下祐二・山極寿一（2010）「野生生物と人間との共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」『農学国際協力』11, pp.109–118.

松浦直毅（2014）「〈住民参加〉によるアフリカ熱帯雨林の保全と開発に向けて――ガボン南西部ムカラバ・ドゥドゥ国立公園の事例から」『アフリカレポート』52, pp. 88–97.

Ando, Chieko, Yuji Iwata and Juichi Yamagiwa（2008）“Progress of habituation of western lowland gorillas and their reaction to observers in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon” *African Study Monographs*. Supplementary Issue, 39, pp.55-69.

Takenoshita, Yuji（2015）“From vision to narrative: A trial of information-based gorilla tourism in the Moukalaba-Doudou National Park, Gabon.” *Tropics* 23, pp.185-193.